

人間学科共通科目「人間学」講演

時代の先駆者たれ ―広岡浅子の生涯を通して―

古川 智映子

日時：2016年5月12日午前9時

会場：創価大学 S201 教室

おはようございます。女性の方が多くて、びっくりぽんです（笑）。「びっくりぽん」ってわかりますか。皆様、朝ドラをご覧になる時間無いから、見ていないでしょう。皆様のお母様とか、おばあ様は見て下さったかもしれませんね。私の年代では、今より少し早めに結婚するので、あなた方の年齢はひ孫にあたるんです。びっくりぽんでしょう（笑）。

幕末から大正の初めにかけては、日本歴史の一大変革期で、大きく歴史が変わりました。その動乱の時代に生まれ、偉大な事業を成し遂げた「広岡浅子」という女性のことを、私に取り上げるまでほとんどの人が知りませんでした。本日は、広岡浅子という女性から学ぶこと、私たちがこれから生きていくうえで参考になりそうなことを、約1時間ご一緒に考えていきたいと思います。よろしくお願ひ致します。（拍手）

「広岡浅子」と大同生命

まずは、「広岡浅子」という女性がどんな人か、スライドを使って説明させていただきます。広岡浅子は、嘉永2年幕末、豪商の三井家（現・京都市）に生まれました。そして、たった17歳で大阪の豪商である加島屋という両

替商にお嫁に行きます。当時、江戸と上方^{かみがた}では、金と銀とで使い方が異なっていたため、京都などで買い物をする際は、今の為替のように、両替商でお金を替えてもらわなければなりませんでした。そして、日本の幕藩体制で大名、藩主は、参勤交代などでいろいろお金を使うため、非常にお金に困っていました。両替商は手数料を取って、銀や金を交換、売買し、儲けたお金を大名などに貸し付けて、さらにそこで利息をもらうという商売をしていました。

この写真(写真1)は、大阪にある土佐堀川です。加島屋はこの土佐堀川の前にありました。左の一番端の手前は、現在の大同生命です。浅子が中心になって大同生命の創業をしましたので、加島屋の後に現在の大同生命が建っております。これはそばで見ると非常に美しい建物で、何か建築の賞を取っています。

土佐堀川に臨む大同生命



写真1

これ(写真2)は、現在の大同生命の写真です。非常に変わった建物で、一階が扇状の柱になっています。これは、広岡浅子が創業した加島銀行の建物の内部を、そのまま模して建てたと言われています。



写真2

広岡浅子の家系

これ(写真3)は、浅子のご主人で、ドラマでは新次郎となっていますが、広岡信五郎と言います。昔の大きいお家は、産まれて2歳くらいで親に

婚約者を決められてしまいます。それで、三井家の女性はず加島屋の広岡一族にお嫁に行くことと婚約させられました。本人は全然知らないで、大きくなってから、人に決められてお嫁に行くことは嫌だと反発します。ところが、この広岡信五郎という人は、なかなかの人物で、昔のお金持



写真 3

ちのお家の坊ちゃんでした。お金持ちの商家の坊ちゃんは、お茶などをして、あまり商売をやらないで番頭任せなんです。ドラマではNHKさんが庶民的な三味線に変えていますが、本当は三味線などしていません。(笑)それで、広岡信五郎は非常に人柄が良く、良いお家に育ちましたから、意地悪というのを始めから知らないような人でした。浅子は、小さい時の遊び道具が生きているヘビだったので、きつときつい性格だったと思うんですが、信五郎は、非常に大らかな人で、そういうきつい浅子の性格を全部受け入れて、支えるんです。信五郎と結婚したということが、浅子が大きく伸びる原因だと私は思っています。現在は、凄く才能がある奥さんを持った旦那さんが、会社を辞めて主夫になって、奥さんを助けるという新しい結婚の形があるんです。それを、百数十年前にやっていたんですよ。凄いことですね。

これ(写真4)は、広岡一族の写真で、広岡信五郎と浅子が中心に居ます。信五郎の斜め右後ろが一人娘の広岡亀子で、右端に座っている男性が、亀子のお婿さんの広岡恵三。



写真 4

それで、他にいっぱい写っていますけれども、皆様驚かないで聞いて

ください。当時のお金持ちは、お嫁に行く際、実家から必ずお気に入りの女

中さんを一人連れて行くんですが、それがこの写真の一番左端に立っている小藤さんです。小藤さんは非常に人柄が良くて、献身的に浅子に仕えます。浅子は、潰れかかった加島屋を再興するために一生懸命で、事業を次から次へと進めていたので、ご主人の面倒がみられませんでした。また、お家を繁栄させるためにはたくさんの子供が居た方が良かったのですが、浅子は難産で女の子を一人しか産めなかったんです。それで、浅子は小藤さんに頼み込んで、信五郎の側室になってもらい、小藤さんと信五郎の間に4人子供が生まれました。写真の左後ろに立っている女の子や、一番右端の男の子は小藤さんの子供です。そうして小藤さんは最後まで浅子に仕えます。子供さんを4人も産んでいても、自己主張一切しない大変賢い人だったみたいです。朝ドラでは、側室がいたなんて言うのが困るので全部カットですが(笑)。

加島屋の立て直しと炭鉱経営

これは(写真5)、加島屋の商店、お家です。表面だけ見ると小さく見えますが、大変奥行きのある大きいお家なんです。これは、工事が始まる前の、昔の土佐堀川です。浅子は分家のお嫁さんですが、加島屋は本家と分家がほとんど同じ敷地内にありました。



写真 5

浅子は炭鉱を経営します。民間では実家の三井は炭鉱を経営していましたが、女性で炭鉱を経営するのは浅子が初めてでした。浅子は、日本の将来が、これからどういう方向に向かっていくか、自分たちはどういう手を打っていったらいいか、先見の明がありました。当時は女性の地位というもの非常に低く、職業として成り立っているのは、カフェの女給さんや、子守、立

派なお家の女中さんしかありませんでした。また、女性の扱いが、小さい時は親に従って、お嫁に行ったら夫に従って、老いたら大きくなった子供に従うという『三従』で、ほとんど人格が認められていませんでした。『三従精神』というものが、日本中に蔓延していた時代に、自立して新しい商売を起こした浅子は日本の女性の先駆けです。

また、その当時、徳川慶喜の大政奉還によって、お金を貸し付けた藩がなくなってしまう。加島屋は四百何十億と大金を貸し付けているわけですから大変です。大阪の両替商は片端から次々に潰れていきました。そして、最後に残ったのが加島屋と鴻池屋で、どっちが先に潰れるか、最後のギリギリまで危ないところでした。また、新選組も加島屋から、現代のお金にすると2千万円くらい借りており、近藤勇と土方歳三、連名で本人の自筆の借借書がありました。それを見せいただいたときは、凄く感動しまして、「歴史の勉強をするってこういうことだな」と思って、紙をなすらせてもらいました。

それで、浅子はお嫁にいった時に、これでは加島屋は駄目だということを本能的に感じます。浅子は豪商三井という凄いお家で育っていますから、商売というものを肌で感じているんですね。三井というのは、大元方といって、十一家でもってお互い守り合い、自分で儲けたものを独占せず一旦取めて、それを割り振っていました。個別ではなく一族一丸で守り合うという優れた組織を生み出した家ですから、いろいろな事を肌で感じています。加島屋は、のんびりしていて全部番頭に任せているので、このままでは上手くいかなくなるのではないかと思った浅子は、親に勉強してはならないと言われていましたが、黙って独学でそろばんや簿記を夜中に勉強しました。

丁度その頃、文明文化が進んで、帆掛船や手こぎの船から蒸気汽船に変わっていき、日本で初めて鉄道というものが出来ていきました。そうすると、蒸気汽船や機関車には石炭が必要になります。更に、外国の船は既に蒸気で走っており、日本に来ると石炭売るように言うわけです。そこで浅子は、潰れそうな加島屋を再興するには、石炭が良い商売になると考えます。浅子の元々の商才、先見の明が活きまして、鉱山を経営してみようというふうに思

うわけです。そうして、おそらく、三井の義理の兄である三井高喜がいろいろな事を教えて、浅子を後押ししていたと思います。朝ドラでは、ディーン・フジオカさん演じる五代友厚が、商売を全部教えたことになっていますけれども、あれは私の小説とは少し異なります。五代友厚のことは少し書きましたが、三井の実家で教えたのだと思います。それで、九州の今でいう飯塚市の炭鉱を借金して買うんですが、思ったほど石炭が出ませんでした。だから、周りのみんなは「やめろ」って言うのですが、すぐ近所の炭鉱で、石炭が出ているから、自分の買ったここだって鉱脈を掘り当てると出るかもしれないと理論的に考えて、「やめない」と言うんです。そして、やめないでさらに掘り続けると、物凄い量の石炭が出てきて、大成功するわけです。約10年間その石炭を売って、最後は儲け切ったところで、当時の35万円で政府に売ります。加島屋というのは、浅子の働きで大富豪になりました。この写真(写真6)が、飯塚市にあった潤野炭鉱です。現在はこの跡が県立の高校になっております。

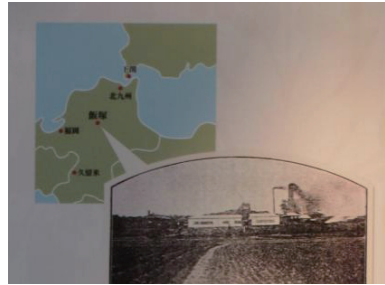


写真 6



写真 7

一人娘の広岡亀子は、広岡恵三という昔の東京帝国大学、今の東大を出た秀才をお婿さんにもらいます。(写真7)

これ(写真8)は、大阪の大実業家である五代友厚です。埼玉県深谷市出身の渋沢栄一と並び、日本のい

ろいろな事業を始めていきました。西の五代友厚、東の渋沢栄一と言われ、大阪の繁栄の基礎を全部作った人で、凄い実業家です。大阪株式取引所、大阪商工会議所等を設立して大阪の経済発展に大きな貢献を果たしました。ド

ラマでは、ディーン・フジオカさんが演じて、人気が出ました。それで亡くなったら、五代ロスといって全国のファンが悲しんだのです。

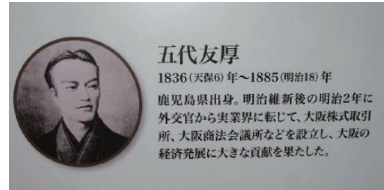


写真 8

日本女子大学の設立

現在の、目白の日本女子大学の創業者である成瀬仁蔵です。(写真9) 成瀬仁蔵は、教育面が凄い先生で、外国にも留学しており、日本の女子はもっと地位を上げなくてはならないと考え、そのために日本初の女子大学を創立しようとしていました。しかし、成瀬仁蔵は経済が全然

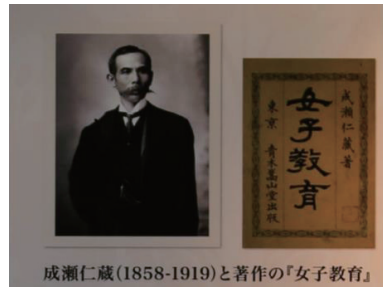


写真 9

出来なため、経済に強い浅子に『女子教育』という自分の書いた本を持って行き、応援を頼みます。初め浅子は辞退するのですが、『女子教育』を読んでとても感動いたします。浅子は小さい頃、親に反対されて勉強させてもらえなかったのが、女性の人格を認めることが書いてある『女子教育』に共感するわけですね。当時の日本では、女性の地位が低かったのが、成瀬仁蔵の考え方は本当に新しかったんです。

これは、浅子を助けた澁沢栄一、西園寺公望、松方正義、大隈重信、伊藤博文です(写真10)。ドラマにも出てきますが、早稲田大学の創業者である大隈重信が一番応援したと思います。始めは寄付が集まりませんでした。浅子が孤軍奮闘して一軒ずつ訪ね歩き、女子教育の大切さを一生懸命説いていきます。すると、段々みんながその趣旨を理解して寄付金が集まるんです。

目白にある日本女子大学は当初は約5,500坪くらいありましたが、あそこは広岡浅子の実家の三井家の別荘を寄付させたんです。浅子は常に自分より、家のため、人のため、社会のため、日本の国のために考えて、一生を貫いた人なんです。

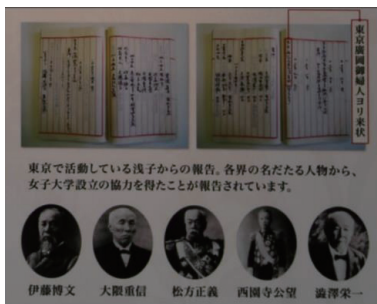


写真10

「広岡浅子」に影響を受けた女性たち

写真の真ん中が、晩年の広岡浅子です。大正8年1月14日、約70歳で亡くなりました（写真11）。浅子は、加島屋へお嫁にいった時は、肺結核を患っていました。昔、肺結核は、抗生物質など薬が無かったので、やせ細って、血を吐いて亡くなっていく死病でした。しかし、浅子は肺結核で亡くならなかったんです。私どうして亡くならなかったのか分からなかったので、小説では漢方薬を飲ませました（笑）。小説は、分からないところは全部嘘ついて作るの、嘘つきですね（笑）。だから、後で文句が出た時、「これ小説ですから」と逃げられるように『土佐堀川』という題ではなく、『小説 土佐堀川』としました。



写真11

浅子は、加島銀行という銀行も創立し、小説では初めて女性行員を採用しますが、これは私が浅子だったらそうするだろうなと思って書いたんです。ドラマでは小説通りの服装、矢絣の着物に、紫の袴でした。朝ドラが有名になると、いろいろな人がテレビに出てきて、評論家が自分の事のように、私の小説の嘘の部分を取り上げて、「広岡浅子は、日本で初めて銀行で女性を

採用したんですよ」と、滔々と述べるので、笑ってしまいました(笑)。でもそんな事は言えないので、黙っていましたけど(笑)。

普通の商人だったら、ただ儲ける事しか考えませんが、浅子は最後、教育に力を入れました。公共のためにお金を使い、人材を育てるということを考えたんですね。御殿場市二の岡にある3,000坪ほどの別荘に、いろいろな人を集めて、女性教育夏期講習会を開いていました。規模は小さく、20人程度でしたが、その中から人材が出ているんです。写真の浅子の右隣は、赤毛のアンなど様々な翻訳をした『花子とアン』の村岡花子です。

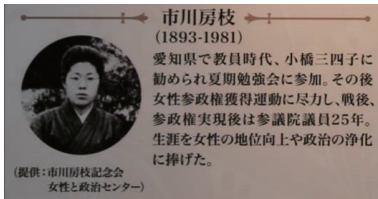


写真 12

皆様はご存知無いかもかもしれませんが、市川房枝は参議院議員の政治家でした(写真 12)。昔、女性は投票権がなかったので、女性の参政権を獲得するために、一生を費やして頑張った人です。初めは教員でしたが、浅

子の指導を受けて、政治の方面に切り替えて、政治家になりました。全国でも参議院トップ当選の政治家で、決してお金なんかによるめかない清廉潔白な人でした。

浅子がどんな人だったか、大体把握して頂けたでしょうか。時代がそういう人を育てたのか生んだのか分かりませんが、女性実業家というのは、日本の先駆けでした。当時他にも、鈴木商店の鈴木よねや、現在の中村屋を創業した相馬黒光、サムライ商会を営んだ野村みち、坂本龍馬を応援した大浦慶などが、女性史に残っています。しかし、そのような人たちに比べて広岡浅子は、朝ドラが出来る前まで、どこを探しても出て来なかったんです。

どん底の始まり

私は、大学を出てすぐ結婚いたしました。主人は都の西北の大学で助手や非常勤講師をしており、私も共働きしまして、所沢に小さいのですが家を建てました。主人が大学の助教授になりまして、生活が安定しましたので、私は勤めを辞めました。その途端に、大変恥ずかしいのですが、主人が大学の女子学生と恋愛になりまして、それでうちを出て行って大変な事になりました。私としては、自分で一生懸命やっていたし、錯覚かもしれませんが仲が良かったと思っていましたので、考えられませんでした。夫はすっかり変わってしまい、私は邪魔者扱いされ、お酒飲んでは「出て行け」と言われるんです。夜、実家の青森県まで行くこともできず、大変恥ずかしくて悲しいのですが、行き場が無いので、切符を一枚買って西武線の始発駅と終着駅の間を、行ったり来たりして、終電までそこで行き場の無い時間を過ごしました。それで、終電で降りて家に戻ると、家の中入れてもらえないので、ずっと庭の隅で朝までうずくまっていました。何も悪い事をした覚えはないのに、どうして私はこのような目に遭わなければならないのかと思い、涙がこぼれて止まりませんでした。

「広岡浅子」との出会い

しかし私としては、このままで一生を終わる訳にいかない、何とかしてそこから立ち上がらなければならないと思い、そのどん底で考えました。今まで、日本で多くの女性が生まれて亡くなっていきましたが、その人たちの中で、私以上に苦しんで、地を這う思いで生きて、そして亡くなっていった女性が居るかもしれない、そこから何か得るものがあるのではないかと思いました。本日はここに、日本で最初に出版された高群逸枝の『大日本女性人名辞書』を持って参りました。高群逸枝は、女性史研究家で、勤勉な方なんです。『大日本女性人名辞書』は、文語文で書いてある部分もあるので、随分昔の

本なのですが、その復刻版が出版されまして、購入致しました。2,000名くらいの女性の名前が書いてあり、片端から読んでいきました。

すると、444ページに「広岡浅子」という名前があって、たった14行ですが書いてありました。三井家に生まれたということ、それから加島屋にお嫁にいったこと、護身用のピストルを懐中に忍ばせて鉱山の経営にあたり、加島屋を再興したことが書かれてありました。昔の鉱山の鉱夫といたら荒くれ男で、殺人など罪を犯して逃げて来て、その鉱山に潜り込んでいるかもしれませんでした。何があるか分からないので、浅子は護身用のピストルを忍ばせて、鉱山の中に入って一緒に働いていました。

よく雑誌の取材の方から、どうして広岡浅子を取り上げたのか聞かれるのですが、護身用のピストルを持って働いていたことを即座に答えます。女性がピストルを懐中に持って、本当に死ぬ気で鉱山の坑道の中に入って、鉱夫たちを叱咤激励して働かせた。そして、鉱山の経営、改革をしようとした。これは、並みの女性ではないと私は思いました。非常にドラマティックなものを感じて、この人の事をもっと調べてみたいと思いました。

『土佐堀川』執筆に至るまで

ところが、これ以外に何も資料がないんです。それで私は、三井の出身ということに目をつけまして、西武新宿線の新井薬師駅から降りて、5分くらい歩いたところにある三井文庫へ行きました。三井家のこれまでの資料を全部集めている三井の図書館みたいなところです。そして、広岡浅子が生まれてから死ぬまでの「三井出水家」という資料を全部出してもらって、ずっと調べていくと、たった4文字「広岡浅子」とありました。ところが、三井の歴史ですから、加島屋にいつてからの事は何も書いていないんです。それで、もうとにかく一生懸命読み探しました。

すると、大同生命の創立に関わったという事が、少し書かれていたんです。それで、大阪の大同生命本社に、「広岡浅子の事を知りたいので、お伺

いしていいですか」とお手紙を書きました。すると、快く返事をしてくださり、藤岡さんという方を担当に付けていただいて、広岡家の資料のある記念室を全部見せてくださいました。それで、今はもう100年を超えていますが、大同生命70年史という分厚い本を見せていただき、そこからご親戚が未だご生存であることを教えてもらえたんです。4代目の大同生命の社長にあたる、先ほど述べた小藤さんの長男の広岡松三郎の奥さんが、まだ生きていらっしゃいました。そこで、西宮市の雲井町に伺って、写真を見せてもらい、いろいろなお話を伺いました。

それから、浅子のお孫さん、亀子の長女が生きていらして、目黒区に住み国際基督教大学の教授夫人になっているということが分かりました。そして、そこにお電話をして、渋谷のハチ公の銅像の前で待ち合わせまして、喫茶店でいろいろなお話を伺いました。また、二の岡の別荘に一緒に行き、そこも見学いたしました。

このように本当に苦労しながら、一つ一つ調べて、調べた先でまた誰かとつながっていったんです。それから、竹内さくさんという、最年少の十代で浅子の夏期講習会に参加した方が、大学の家政学の教授となって、ご生存であることが分かり、二の岡の別荘での浅子のことを全部聞きました。

そして、日本経済や、日本のお金がどのように変わっていったかという貨幣の歴史、それから浅子が生きている間にどのような歴史的な事件があったかということを勉強して、調べました。大阪大学の教授の宮本又次さんが、日本の豪商の歴史に詳しく、膨大な本を書いていることが分かったので、何度も大阪や京都へ行って大変な思いをして調べました。当時お金が無かったので、800円のユースホステルに泊まり、朝はアンパン1個と牛乳1パックを自動販売機で買って食べて、そして本当に苦労して調べて、約800枚近くの手稿を書きました。しかし、私はあまり自分が有名になろうという気も無く、どこか持って行くにも知っている出版社も無いので、本にならないまま机の中に眠っていたんです。

人生の転機

ところが、昭和 63 年創価大学で、たまたま創立者の池田先生がいらして
る時に、私もロンドン喫茶というところに居たんです。すると、そばを先生
のご一家が通って、30 分間先生からいろいろな話を伺いました。その時に、
「今何書いているの」と先生がおっしゃったので、「私、日本で最初の女性実
業家の広岡浅子という人のことを 800 枚近く原稿を書きました。でも、自信
が無いので駄目です」と言って下を向いてしまったんです。すると、奥様
がいらして、「あら、日本で最初の女性実業家、凄く良いテーマじゃないの」
とおっしゃってくださり、先生が「なんとか本になるように考えてあげよう」
とおっしゃって、潮出版社から、『小説土佐堀川』という本を出版すること
になりました。

800 枚近くの原稿となりますと、上下の 2 冊の本になりますが、無名の人間
ですので、2 冊の本というのは売りにくいんですね。それで、半分に無理
して縮めました。だから、『小説土佐堀川』は箇条書きみたいな小説で、心
理描写は全部カットしてしまっているんです。

私は、離婚はするし、お金は無いし、本当に運が悪かったんですね。とこ
ろが、先生にお会いした辺りからツキが良くなったんです。

本が出版されてまもなく、日本で一番の芸能社の東宝の企画室の方が、た
またま本屋さんの前を通りかかって、私の本を読んでくださいました。そし
てこれをお芝居にしようとおっしゃってくださり、東京宝塚劇場で八千草薫
さん、伊東四朗さん、大空真弓さん、大場久美子さんが演じてくださいまし
た。大同生命が土日は借り切って、3,000 人くらい入る劇場で公演してくだ
さいました。そして毎日放送で、連続ラジオドラマになったんです。

それで 20 年以上経った時に、NHK のエグゼクティブ・プロデューサー
の佐野さんという方が、朝ドラの候補を一生懸命探していらっしやいまして、
神戸、京都、大阪の図書館へ行って、片端から本を読んでいき、たまたま『小
説土佐堀川』を手にとってくださり、これは良いドラマになると思ったそう

です。そして、去年の1月14日、広岡浅子の命日に、NHKからドラマ化決定という正式発表がされました。そして、9月28日から4月2日まで、第93回目のNHK連続テレビ小説として放送されました。それで全国から、「元気が出た」「病気を克服します」といったファンレターがたくさん届きました。大変でしたが、夜中の1時、2時まで返事を書きました。また、ファンの方が大根や白菜持ってきてくださって（笑）。朝早く大きいボール箱を二箱もいただいて、1人で食べられませんので、またそれを全部配りまして（笑）。本当にありがたいと思いました。

「広岡浅子」から学ぶこと

やはり、自分の人生を放棄しないで、本当に苦勞しても負けない、諦めない人生が大切ですね。広岡浅子の主義にもあるように、人間が成功するためには活力、やる気がなければなりません。それから、真我と小我についてです。エゴな我にとらわれて押し通して生きていくと、人間は行き詰まります。自分のエゴや、小さい自分を超え、より大きい、人のため、社会のため、国のためと、真我に基準を置いていったとき、人間は行き詰まりがなくなります。また、浅子が一番主張した真髓は「九転十起」、ドラマでは「九つ転び十起き」と言っていました。「九つ転び十起き」は広岡浅子が作った言葉です。浅子は「七転び八起き」よりも二回多く失敗しても、また二回多く立ち上がり、どこまでもめげずに進んでいく、そして必ず自分の立てた目標は完遂していく、そういう前向きな生き方でした。今日、女性活躍推進法という法律が出来まして、安倍内閣は女性の活躍を主張していますが、今から百数十年前、誰も女性の人権を認めなかった時代に、自らの生き方によって、女性の活躍や、先進的な女性の生き方というものを示していった広岡浅子は、偉大な女性の先駆者であったと言えるでしょう。

私は有名な作家でも、大した人間でもありませんが、自分に与えられた宿命から逃げずに耐え抜きました。認められなくても続けていくと、朝ドラと

いう全国に影響を及ぼすドラマの原案となって結実しました。やはり人生というのは、最後まで諦めずに、努力していくことです。継続は力なり、自分の立てた目標はやめないことです。そして、今日という一日をいかに自分が懸命に生きていくかという積み重ねです。

浅子も、初めから偉大な女性実業家になろうとは思っていませんでした。とにかく、加島屋と自分にふりかかってきた困難を、必死になって克服していく。その間に、生きるという事が鍛えられていったんです。命が鍛えられて、強くなって、負けない人生になっていったんです。浅子は肺結核の後に乳がんになりますが、忙しくて病院に行けませんでした。乳房が赤ん坊の頭ぐらい大きくなって、乳首が割れて紫色になっていたそうです。末期症状でしたが、今の東大、昔の東京帝国大学の医学部、近藤外科の近藤教授が手術してくださり、きれいに治って、再発しませんでした。私は、九転十起の負けない浅子の心意気に、病魔も恐れをなして、退散したのだと思います。

私自身も、病気に次々とかかり、10回入院して6回手術しております。また、左目が緑内障で見えなくなってしまう、失明しかけました。しかし、そういう時に必ず日本一の名医が現れてくれるんです。それで緑内障も心配なく全部克服でき、84歳まで生きてきました。

運が強くなると、こっちで売り込もうとか策略しなくても、良いお話が向こうから自然にきます。飛鳥Ⅱという船で世界一周することができ、100日間外国を見てきました。

求めずして自ら得る「不求自得」という古い言葉がありますが、自分を売り込もうとか、贅沢な生活をしようとか思わなくても、自然に手に入っていく境涯が、本当の強い運なんです。そして、強い運というのは、怠けてほんやりしていてもつきません。強い運になるためには、人に尽くさなければなりません。自分が今、当面している問題に、真剣に取り組んで努力しなければなりません。努力を重ねていくうちに、必ず運が強くなっていきます。そして、運が強くなると、良い人に取り囲まれます。良い話というのは、一人で歩いてくるのではなく、必ず誰かが持ってきます。そのような境涯にね、

ならなくてははいけません。

自慢ではありませんが、この頃、私は自分がその境涯に近くなったかなという気がしています。みなさんも今のうちから、ある程度自分の目標をしっかり立てて、その目標が変わる事もあるかもしれませんが、それに向かって、今日一日努力してください。"今日"を無駄にしない、その繰り返しです。負けない見事な勝利の人生、栄冠の人生が輝く事を信じて、頑張ってもらいたいと思います。よろしくね、頑張ってるね。以上です。— (拍手) —

質疑応答

学生A：実は、私の母が古川先生の大ファンでして、『朝が来た』の最終回も、ボロボロ涙流して見たそうです。私の祖母が亡くなる間際に、母に渡した小説が『土佐堀川』だったそうで、僕自身、本日先生の講義を受けられることに、凄い運命を感じています。

古川：そうですか。お帰りになったらよろしくお伝え下さい。

学生A：今晚、母に、先生の『土佐堀川』出版に至るまでの試練と苦悩と情熱と、NHKの話をしっかり伝えていきたいです(笑)。ここからが質問なのですが、先生は作家としてスランプに陥った時に、どのように乗り越えていったのでしょうか。

古川：私の一番のスランプは離婚でした。家族が居ないので常に孤独でしたが、良い友達に恵まれ、励ましてもらえました。それから、自分なりに人に奉仕致しました。いろんな市の公演や講座、セミナーを、三十何年間無償でやりました。声がかかると、どこへでも行きました。全部費用は自分持ちですが、一切報酬は求めないし、頂きませんでした。お金がなくても、歯を食いしばって、我慢したんです。浅子ほどは出来なくても、自分なりに、ボランティアですってやって、克服出来たと思います。どんどんセミナーを入れて、皆さんにお話すると、自分が元気になりました。だから、

スランプに陥ったときは、じっとしていないで、何かしなければ駄目ですね。例えば、ボランティアでも、奉仕でも、何か行動を起こした方が良いと思います。そしてそれが、人のためになるような行動であれば、非常に良いと思います。

学生A：今日しか出来ない事を頑張りたいと思います。いつやるか、今でしょ、ですね。

― (拍手) ―

学生B：人間学の授業で古川先生が来ると聞いた時に、急いで購買で小説を購入いたしました。

古川：お金使わせてしまってごめんなさいね。

学生B：いえ、お金以上の価値をいただきました。小説を読んだ中で、浅子が鉱山にピストルを持って行くシーンが大変印象的でした。そのシーンについて、先生は先ほど、護身用のピストルとおっしゃいましたが、小説の中では、自決用とあったので、先生に伺おうと思いました。

古川：小説というのは、色々変えたりして、惹きつけなければならぬんです。単なる護身用で終わってしまったら、たとえ撃たなくても殺人みたいになってしまいます。だから、ドラマティックに物語を高めるために、最後は自分の喉にピストルを当てて、自分がこれを失敗したら生きて帰らないつもりだという、自決する覚悟をほのめかしました。詐欺などマイナスの嘘は良くありませんが、作家は結構、いろいろな手を打っています (笑)。浅子と会ってないし、炭鉱に行っていないから、何にも分からないので、嘘付くしかないでしょう (笑)。しかし、ピストルを持って行ったことは記録に残っているので、そこまで覚悟したということですね。当時も今も考えられないです。浅子は、よほど気が強かったのかもしれませんね。

学生B：ありがとうございます。

—（拍手）—

学生C：私、小学校二年生の時から小説家を目指してまして、古川さんの講義を聴けることが嬉しくて、大変感動しています。私も今、小説を書いているので、さきほどのスランプの話が大変身になったんですが、先生の発想はどこから湧いてくるのでしょうか。

古川：私は、どちらかと言えば、理知の人間ではなく、情感の人間なので、想像力が凄く豊かなのだと思います。だから、思いが自然に、いくらでも浮かんできます。これは、小さい時、たくさん本を読まされたことに関係があると思います。お土産が、おもちゃだったことは一度もなく、全部本でした。また、うちは、太宰治が卒業した旧制弘前高校の真向かいで、和菓子屋と喫茶店を営んでいたんですが、喫茶店にコーヒーを飲みに来たお客さんでお金払えない方は、本を持って来て置いて帰るんです。母はお人好しだから、本でも良いって言ったんでしょう。私は、押入れに山積みになるくらいの本を、小学校の頃から読んでいました。やはり、良書をたくさん読んで、いろいろな事を想像してみる訓練をしていけば良いと思います。ある女性作家は、「作家になる条件は何ですか」と聞かれとき、「鈍」「根」「運」と言ったそうです。才能の「才」とは言いませんでした。「鈍」は鈍いようでも繰り返し努力をしていくこと。「根」は逃げない、捨てないという粘り強さ。そして「運」を強くしていかなければなりません。たくさん良書を読んで、いろいろな事を想像したりして、書くことをずっと続けてみて下さい。頑張ってください。

学生C：はい、ありがとうございます。

—（拍手）—

学生D：受験期でしたが、『朝が来た』だけは毎日撮り溜めして観ていました。最近、歴史の本を読んでいるのですが、近代史、昭和、明治より前の時代の本は難しいイメージがあって、あまり手が出せないうえです。古川先生は、どのような本を読んでいたのでしょうか。また、その本を読んで、どのようなことを学んで、どのように自分が変わっていったのでしょうか。

古川：私も、歴史はあまり得意じゃありません。だから、"特別にこの本"というのは挙げられないのですが、『歴史街道』のような全体の流れが分かる概略的なものが、いくらでも売っていると思います。私も『日本史』という、その年にあった事件が書かれている本を、いつもそばに置いて見えています。だから、初めは簡単な日本史の概略本を買うといいのではないかと思います。また、私が尊敬している人は、司馬遼太郎先生です。司馬先生の歴史感は凄いなと思います。司馬先生の『街道がゆく』など、歴史のことをいろいろ書いたものを読んでみると良いと思いますよ。

学生D：はい、ありがとうございます。

―（拍手）―

学生E：私は芥川賞作家を目指しています。

古川：頑張ってください。芥川賞の選考委員長の宮本輝先生は、『土佐堀川』の解説を書いてくださいました。

学生E：質問なのですが、小説を書くうえで、影響を受けた小説家を教えていただけないでしょうか。

古川：やはり、司馬遼太郎ですね。それから、東京女子大で私と同期だった有吉和子です。当時、有吉さんの『恍惚の人』は100万部売れて凄かったんです。この本は、今騒がれている、認知症の老人問題をテーマにして書かれています。それから『複合汚染』という、いろいろな公害の問題について書かれている本もあります。有吉

さんの小説は、凄く調べて書いているんです。作家の中には、自分の感覚で書く人も居るんですが、それは本当に才能がある人だと思います。作家というのは、自分の命を削っていく商売です。川端康成は、『小説作法』という本で、"文章を書くという事は、骨のペンに血のインクを付けて書くこと"と書いています。ものを書くというのは、それだけ大変なんです。だから、やはり有吉佐和子さんや司馬遼太郎先生は、その見識の広さが凄いと思います。『竜馬がゆく』はお読みになりましたか。司馬先生は文章が簡潔で、裏側に凄い思想があるので、お薦めします。

学生E：ありがとうございました。

— (拍手) —

学生F：浅子の人のために率先して動く行動力、その生き方に何度も励まされて、楽しく観ていたんですが、先生はドラマ化が決まった時、実際にドラマを観てどう思いましたか。

古川：良い質問ですね。朝ドラには、原作者ではなく、「原案」と出るんです。原案ということは、元になった小説とドラマがかなり違うということなんです。例えば、小説に出てこない人物が、ドラマにはたくさん出てきます。小説では、浅子の姉のはつさんは、天王寺屋が破産して、長屋の片隅に逃げて行ったところで消えてしまっています。しかしNHKでは、姉妹の物語を書くために、その後、はつがみかんの農家になることなど、全部脚色しています。普通の作家は、このような脚色についてNHKに文句を付けるそうです。NHKから、「先生の小説と違うところが随分あるかもしれませんが」と言われたので、「あなた方は、何十年とこの道を歩いて来て、努力なさって、良いドラマを作っているプロですから、素人の私は一切口出しはしません。どうぞ、のびのびと自由にやって下さい」と申し上げました。私は、大衆に浸透していくためには、い

ろんな山や谷をつけて、そういう形を取った方が良いと思うんです。例えば、ディーン・フジオカさんが演じた五代友厚は、小説に少ししか出てきませんが、ドラマではずっと出てくるわけでしょう。だから、私はそれで良いと思って、満足しています。その結果が今世紀最高の視聴率ですから、NHKのスタッフのやり方は間違っていないと思っています。あまり、細部にこだわらないで、自分の小説を取り上げて頂いただけでも感謝しますと申し上げました。それで、3月10日にホテルニューオータニ大阪で、ドラマの撮影が終わった後の打ち上げパーティーがありました。波瑠さんも、玉木宏さんも、辰巳琢郎さんもみんな側へ来てくださいました。そしたら、NHKのお偉いさんが、「先生がクレーム付けないから、凄くやりやすかったです。ありがとうございます」と言って、名刺を持って来てくださったんです。それから、日本女子大のお偉いさんも打ち上げパーティーにいらっしやって、「先生が広岡浅子を書いて下さったおかげで、今年受験応募者が1500人も増えました。宣伝になって、ありがとうございます。」と言ってくださいました。

学生F：ありがとうございます。

― (拍手) ―